

少し続けて私の思い出ばなしをお読みいただいた方は、なんとまあガツと何にでも次から次へ飛びついてやるんだらうと思われたことでしょう。

しかしあの時分は、書道に直接益のある本も、書道の周辺でぜひ身につけておきたいものも、今日から見ると実にお粗末千万で、早速役に立つものは全く少なかった。少なかったというよりもなかったと大げさにいいたいくらいだ。

だから雑誌の連載ものを切り抜いて表紙をつけて、拵えた本なども大分ある。まあ今日書道をおやりになる人々は、私どもの時代からみると何百倍楽になっているか、あんな思い出にあるような勉強会に出ることなんかまずないんじゃないかと思うくらいです。

昭和の初めころに松下太虚先生の古筆の仮名の字書が一冊出た時の有り難かったこと。その後、羽田春埜先生の『行成字鏡』が出る。これもまた大歓迎された。こういうものが出る前には一般に持っているものは西東書房の『五体字類』の付録が最も手近かにあるものであった。

したがって説文の本といつても『説文詁林』という九十種本などという大全集風のものか、『文字蒙求』か『文字蒙求広義』、ずっと飛びこして段玉裁注の『説文解字注』となり、日本語で書かれたものは、内閣におられた高田竹山先生の『説文捷要』という薄いの『日用漢字正解』『大系漢字明解』など、先生は説文の大衆化には実にご努力をおしまれなかつた。

ところが京都大学、ほかに京都の官公立以外の先生方で説文の新しい研究の方々が、最近ヨーロッパ各国の東洋文字研究を参照したり、中国自身も自国の古典の再検討にのり出して新研究の発表が多くなつた。東京大学の中国文学科の先生方も、たしかに科学的といえる説文研究新学説が出されると、二松学舎大学学長であられた前東大教授の加藤常賢博士の『漢字の起源』という大著でも、少し足りな

いものがあるような気がしてくる次第で、書道の隆盛につれて附帯学の文献量の増えたこと増えたこと驚くばかりである。

このころは、書道関係の研究文献全体のインデックスである『書道事典』、中国だけの『書道辞典』、日本の古筆の研究に資助する『古筆大事典』もあるという盛況を呈している。こんな風だから「かな入門」「漢字入門」「書道入門」式のものほどのくらいあるか、近ごろはもう何か専門の小研究会みたいなものはほとんどいらなくなつた——というのが実状である。全く勉強資料は酔うほどの量である。

だがしかし、ここでちょっと毒舌を弄すると、それならこんなに書道が盛んになったんだから、みんながみんな書道の学者になつたかというところ——さにはあらず、さにはあらず。かえってむしろ学問として数は別として、質は低下しているからおもしろい。

本がいつでも手許にある。また金さえあれば買えるとなると、学問そのものが何となく安っぽく見えて本気で取り組まなくなる。すなわち図書館の係員は決して学者ではないのである。

そこで本場に眼の開いている学書家は、むかしとあんまり違わない「〇〇本を読む会」などという地味な会を作つて、同志を集めてやはり読む会をやっている。

これは私にもちよつと覚えがある。昨年頼まれて『写経早わかり』といった本を一冊刊行した。著者の私も大分だけだったので、方々へ頒けてあげたところ、その中のひとりが宅へ来て、「写経をやる急所はなんだ」などと訊くので、「君はこの間の本をまだ読まないの……」と聞くと、「ア、あれに書いてありますか」といい帰つて行つたが、私はやっぱりまだ読んでいないナと睨んでいる。(つづく)

〔筆間雑記〕中村素堂随筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〈「書範」、昭和56年8月〉

